

第20講 小説(1) — 語義

要旨整理

短い語句の意味を問うのが語義問題である。小説では例年、必ず出題される基本的な設問で、ふつう問1に置かれる。問われる語句は三つ。その代表的な設問形式には次のようなものがある。

・傍線部(ア)の語句の本文中における意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。

・傍線部(ア)の表現の本文中における意味内容として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。

◎解法のポイント

- ① 基本的には辞書的な語義が問われるが、「本文中における意味」として最も適当なもの」とあるように、辞書的な語義をもとにしながらも、前後の文脈に合った表現を選ばなければならない。特に多義語の場合、このような指示を与えることで一つの語義に特定する意味をもっている。また、正解が意識に近いものもまれにみられる。
 - ② 問われる語句は一般常識の範囲を超えない程度のもので、熟語から慣用句(例えば「手」や「口」などの身体部位を用いたもの)までさまざまである。ただし四字熟語や故事成語の類が問われることはごくまれである。
 - ③ 知識問題の色合いが濃く、論説・評論文の問1の漢字の書き取り問題同様、時間を割いて熟考すべき問題ではない。わからなければ見切りをつけることも必要。
- 語義問題は語彙力が勝負といえる。ふだんからこまめに国語辞典を引いたり、慣用句を整理して覚えたりするなど、語彙力を高めるような心がけよう。

演習問題 A

次の文章は、伊藤桂一の小説『潮り鮎』の一節である。主人公の**ぼく**は、軍隊での戦争体験を経て、**母**、**妹**と暮らしているのだが、ある日、その**妹**が**発作**を起こして倒れた。これを読んで、後の設問に答えよ。

妹は一応症状が落ちついてから、N大病院へ週に一度通いはじめていて、症状にも的確な診断がえられていた。いつまでつくかわからない根気づくめの療養の道が残されていたのだが、ともかくためらい勝ちながらも**小康**を得つつあった。危地を脱した、という、とりあえずの**安堵感**が、母やぼくの心情に**明るさ**を与えてくれた。そしてそれは、**祈禱師**の力が、どのように効果あったかの判断をする**余裕**をも与えてくれていたのである。**風山**が、しよせんはあやうげな祈禱師でしかなかったことが、霧のうすれて行くように、ぼくたちにはわかってきたのだ。**A**がもし妹の病状が、よ

Link & Q

読解のポイント

- (1) 小説の問1では、たいていは語義を問う問題が出題されるが、まれに一般的な語義ではなく、作者の特殊な用語法による派生的な語義が問われることもある。

〈例〉「よい嗅覚」(二〇〇〇年本試験)。

「現在進行形」(一九九九年本試験)。

- (2) 「意識」とは、語句一語一語の意味にこだわらずに、文章全体の意味を重視して訳すこと。

- (3) 身体部位を用いた慣用句については、大型の国語辞典(『広辞苑』や『大辞林』など)で確認するとよい。例えば「口」で引くと、「口をはさむ」「口がすべる」「口を割る」など、その語に関する慣用句が一覧できる。

- (4) 近年はあまりみられないが、過去には語義以外の事柄が問1で問われたこともある。

〈例〉比喩表現(一九九五年本試験)。
語句の用法・用例(一九九七年追試験・一九九六年追試験)。

重要語句

- ◇根気づくめ 一つの事を飽きずに行う気力をひたすら持ち続けること。

り不幸な状態に陥^{おち}ちていたら、母はむろんばくまで、この世におけるあらゆる、淫^{よん}祠^し邪教でさえ信じたくなくなったに違^{ちが}ない。
「猫のせいにして悪いことをしたね」

と、母は笑ってつぶやいたりしたものだ。それともうひとつふしぎなのは、二度目に風山が来たとき、妹が彼を嫌^{きら}い恐^{おそ}れるような素振りを示したことである。おそらく風山のもっている祈禱^{きと}の意味に、本能的な反^{はん}撥^{はつ}があったのたろう。彼のくれたお守りをつけるのをいやがって「要らない、要らない」と依怙^{よこ}地にいい張った。妹はもう一つ浅草寺のお守りをもっていて、それは腰のところに、大切に提^ひげていた。ほくは妹がすべてをそれに託^{たく}したような形で、腰につけているお守り袋をみると、その度に、いつ死ぬかしない戦線^{せんせん}で、兵隊たちが大事にしていた認^{しん}識^し票^{ひょう}を思^{おも}い出した。
①その運想^{うんさう}が、へんにばくを悲^{かな}しませた。

②そのころまた妹は、毎日観音様が見える、といって、母が画用紙を渡すと、色鉛筆でその幻視の絵を何枚も描いた。手にも麻痺^{まひ}があつて文字一つ書けるわけではなかったが、こまかにふるふる筆致で描かれた絵は、巧拙^{くせつ}を超えて、ほくらにふしぎな意味を教えた。母は素朴に感動したが、ほくはその絵の裏側にある、一個のいのちの、不安^{ふあん}と祈^{いの}りについて、自身もまた解^ときがたい不安^{ふあん}と祈^{いの}りをもつて考えざるを得なかった。母がその絵をほくに見せたとき、ほくはその意味を解^とく手がかりを求めるように、床の上に起き直っている妹をみたが、やはり彼女は放心したようにどこへともなく視線をあずけていた。同じ家の中に住んでいて、ほくは妹に、ふと珍しいものをでもみるような淡^{たん}い驚^{おどろ}きと違和^{ごわ}感を抱^{かか}くことがしばしばあった。充分に言葉をもつて意志が通じ合わないためでなく、なぜだか妹が、別個な次元にいるような気がしてならなかったのだ。それはほくにいらだたしさと恐^{おそ}れの情をもたらしした。ほくは妹が、とにかく日々、回復の行程を進みつつあるとは知^しっていないながら、なにか、よくないことがあるのではないか、ほくたちの上を悪い星が廻^{まわ}っているのではないか、という想^{おも}いをすてきれなかったのだ。

妹は自分が、効^かもなく倒れたことによつて、すべての意味で母に繋^{つな}がった。二人きりの秘密の部分も秘密でない部分も、すべてが人間の原初の、あの母と子の形に還^{かえ}つたのだ。母は生きている関心の一切を娘のためにそそぎつくしているようにみえた。夜更け、ほくは隣の部屋に起きていて、母と妹との軽い寢息^{ねいき}が、静かな調和^{てうわ}を醸^かしてつづいていくのを聴くと、たぶんそれが人間のもつとも純粹な生甲斐^{なまがひ}に違^{ちが}いなく、淡^{たん}く澄^{すみ}んだ安堵^{あんこ}をかんだのだ。ほくは、ほくが人生で掬^くみ得るものは、このような感慨^{かいがい}だけでもしれないと思^{おも}い、そしてそのことにも、いいがたい充足^{じゅうじき}を覚えただのである。

妹の倒れた年は、久慈川はもちろん、近郊の河にさえ、ほくは一度も釣りに行かなかった。毎日機械のように、家と勤め先を往復するほか、ほくにはなんの道楽もなかった。せめては日曜の午後でもを、あまり費用や時間のかからない近郊の河川へ出向いて、時期時期の魚を釣^つることが、ほくのたつたひとつの頭を癒^{なぐさ}める方法であった。しかし寝ている妹と、付き添っている母の姿を考えると、ほく自身もまた、できるだけ苦役に従^{したが}わねばならないような、責任をかんじてくるのだ。それでも三月、半年と日を数えて行くうちに、妹の症状も落ちついてきた。全快という目標は医師に

◇ 危地^き 危険な状態。
◇ 安堵^{あんこ} 安心すること。
◇ 祈禱^{きと} 神仏の加護を求めて祈る僧侶や神官。

◇ 依怙^{よこ}地^ち つまらないことに意地を張ること。

◇ 幻視^{げんし} 実際にはないものが、あるように見えること。

◇ 巧拙^{くせつ} 上手なことと下手なこと。

◇ 放心^{ふしん} 何も考えずにぼんやりしていること。

◇ 悪い星が廻^{まわ}っている 何をしても悪い方向へ向かつてしまう、運氣の良くない状態のこと。各人の運命を司^{つかさど}るといふ、星のめぐりあわせを「星廻り(回り)」といい、「星廻りが悪い」といえば、運氣が良くないことをいう。
◇ 効^かもなく ぶがいない。

◇ 道楽^{だうらく} 趣味。

◇ 苦役^{くえき} 苦しい労働。

も定かにわからぬほど遠かったが、ともかく療養の中での、ささやかな安定を得ていた。ぼくは帰宅して玄関の扉を明けるとき、大丈夫だろうか？ という一瞬のためらいが、いつも頭を掠めて過ぎるのをかんじた。ひっそりしていると、どこかが痛んで、妹は寝ついていることが多かったのだ。

翌年になって、春の兆しが始めると、ぼくは山でも野でもいい、どこか水の匂いのするところへ出向いて行きたかった。何となしにだが、ぼく自身のなかにも、降り積もっている憔悴の影をかんじた。確たる理由もない疲れを覚えていた。ぼくは十数年前、アメリカの軍船に乗せられて佐世保港へ復員してきたのだが、緑の濃い内地の島影をみてもなんの感懐もなかった。ぼくはただひどい疲れと、未来に対する徒労感だけをかんに、鬱蒼と繁り合っている樹々に圧迫されるものをかんじた。わずかに家族の支えで、それからの年月を生きてきたようなのだ。何事にも期待することなく、自身が戦争を生きて還ってきたことの、死者に対する償いをでもするような気分、自身にとめて苛酷に生きてきた。そして長い灰色の刻のなかに醸されていた、無常観のようなものだけ親しんできたのである。

それでも生きている限りは、自身のなかへ灌漑できる何か欲しかったし、できれば活力を与え得る、なにかの事象と接したかった。しかしぼくは淡々と水のような生き方を重ねてきただけで、たまに河のほとりに立つときだけ、樹々や草木の華やかな饒舌を楽しんだのである。そしてそれで結構幸福だったのだ。

釣りに、ひとつだけ実益があった。それは母が、川魚の淡泊な味を好んでいたことで、ぼくはなるべく味のよい魚の棲む河川をもとめては釣りに行った。釣果は母の膳に供する。これは効なき子の、いわば養老の釣り」とでも称すべきことであったかもしれない。それとも或いは、ぼくそのものの人の養老であったかもしれないのだ。なぜならば、ときおり自身をよほどの老齢でもあるように錯覚してしまっていることがあって、そんなとき、ゆつくり自分をふり返ってみては、まだまだ前くぐみに衰えて歩み歳には、かなりの距離のあることを改めて知るのだった。そして、ああそうだったのか、疲れているんだな、といった妙な安堵をかんじ、この悪い歳月の流れを、どこかで喰いとめねばならないのだ、と、しみじみ思ったことであった。

四月のある日は、ほんとに久しぶりに、成田線安食周辺へ、*乗っ込みの鮒を釣りにいった。こころはぼくのよく通ったところで、長門川のほとりを、麦や菜の花を眺めながら、蝶と一緒に堤防を歩いたものだった。春の、甘い空気に身を浸し、リズムカルに歩調をとりながら、ぼくはよく「三本ボプラから右へ二間」とくり返したものだ。利根閘門に近い河岸の、三本ボプラから下流へ二間ほどのところに、この川筋の特筆すべき好釣り場をみついていたことである。

ぼくはその日、ボプラのあるあたりまで出てみようかと思ひながら、駅を出て右へ畑中の小径をたどり、堤防へ向かってしばらく歩いていたのだが、途中で、ふと、傍らの細流に白く閃くものをかんじて足をとめた。そこは堤防下の沼へ流れ込んでいる細流が、ひとところに小さな淀みを作っていて、その淀みへ案外水量のある流れが落ち込んでいる。ぼくが足をとめ、その淵に視線を投げたとき、三寸に満たない真鮒が一尾、ヒラリと、みごとな姿勢で、淵から、上の流れへ跳ね込んだのだ。つづいてそれを追うようにまた一尾、水を跳ねて流れに踊りこむと、流れに身をくるめかせて素速く上流へ溯っていった。ぼくの眼を掠めた白いものは、淵から踊りあがる、乗っ込みの鮒の鱗のきらめきで

◇憔悴〓病氣や心配などのために、やつれ衰えること。

◇徒労感〓苦勞して働いたのに無駄に終わり、がっかりする感じ。

◇鬱蒼〓木々が青々と盛んに繁るさま。

◇無常観〓一切のものは生滅流転し、永遠なものは存在しないと悟る境地。

◇灌漑〓田畑に水を引き、土地を潤すこと。

◇饒舌〓おしゃべり。

◇釣果〓釣りの成果。

◇膳に供する〓食事として差し出す。

◇二間〓尺貫法の長さの単位で、一間は六尺（一・八メートル）。よって、「二間」は三・六メートル。

◇くるめかせる〓くるくると回す。

あつたのだ。

ぼくはしばらくのあいだ、道のほとりにしゃがみ込み、淵から瀬へ溯つて行く真鮎にみとれていた。かれらは素朴な産卵の意志だけに燃えて、淵から瀬へ、さらに溯つて身を横にせねば進めないような田ん圃の中にまで達する。かれらは小さな魚体を駆つて、未来になんの疑いも恐れもなく、ただこの駑蕩とした春昼を喜びながら溯つて行くのだ。ぼくの眼の前で、かれらは二尾、三尾と、いじらしい跳躍をつづけて細流を溯つたが、しばらくすると、一群の行動が終つたのか、あとはねむたい陽ざしのなかへ、落ち込む水音だけがきこえていた。

ぼくは、ふたたび堤防へ向いて歩みながら、ごく爽やかな感動を覚えていた。ぼくのなかに住みついていた溯り鮎の意志をかんじた。無心に、純粹に、美しく、ただ許された水のなかを溯つて行くにすぎない魚の姿勢が、ぼくに何かの啓示を与えながらひらめきつづけたのである。それはぼくが、持ち得ているようで、その実少しも持ち得ていなかった、生きるための活力の尊さを教えた。春の日の道の片ほとりの、なんでもない自然のできごとでしかなかったのに、ぼくはひどく胸のふくらむ想いがして、微風のなかを、いつにない元氣な歩調で歩いた。自身の生きている世界が、どのような暗さに満ちていてもかまわない、自身のひとすじの道だけを、信じ溯つて行くことだ。そうしてたぶんそのときに、ぼくが道で行き迷うときの口ぐせであつた、あの童謡のようなもの「ヒラリヒラリと越えたいな」という奇妙な語句が生まれたのではなかったらうか。人間を支えているものは意外にささやかな生命感だけなのだ、という気が、そのときぼくにしていたのである――。

(注) 淫祠邪教：人心を惑わすいかがわしい宗教。

猫のせいにして：妹の病氣について、かつて母が猫のたたりではないかと語つた場面を受けている。

認識票：戦死の際に人物が特定できるよう、兵士が身につけた金属製のプレート。

復員：兵士が招集を解かれ帰還すること。

養老の釣り：「養老の滝」という親孝行の故事をふまえた表現。

乗っ込みの鮎：産卵期を前にして深いところから浅いところへ群れてくる鮎。

開門：運河・水路で水量を調節するための水門。

問一 ―― 線 a～c の語句の本文中における意味の説明として最も適当なものを次の各群の A～オから一つずつ選び、記号で答えよ。

- | | | | |
|---|------------------------|---|-------------------|
| a | 小康 | ア | 病狀が一進一退をくり返していること |
| イ | 病狀がやや持ち直して安定すること | ウ | 病氣が何の跡形も残さず消え去ること |
| エ | 病勢がよくなくなって生活に支障がなくなること | オ | 病氣が一定の状態を維持し続けること |

◇駑蕩Ⅱのどこで、おだやかなさま。
◇いじらしいⅡ弱い者が一生懸命やっている様子が心を打ち、痛々しく感じられるさま。

◇啓示Ⅱ(神仏が)さとし示すこと。

◇養老の滝Ⅱ昔、源丞内が湧き出る泉を見つけた。その水はお酒であつたので、年老いた父を養い喜ばせることができたという伝説に由来する故事。

△語義を問う設問。

a 本文のみならず、日常における用例にヒントを求めることも選択肢を絞り込む手段のひとつ。

b 醸して
ア かすかに乱して
イ ほのかに発して
ウ ほどよく整えて
エ ゆっくりと包み込んで

オ 徐々につくり出して

ア はげしく傷つけて

イ 華やかにきらめかせて

ウ せいっぱい動かして

エ ときおり休ませて

オ むりやり追い込んで

「 」

「 」

問二

線① その連想が、へんに

「を悲しませた」とあるが、それはなぜか。最も適当なものを次のア～オから

ア 妹のお守りをあたかも兵隊たちの認識票のように見てしまうことで、妹の病状に希望が見えはじめた今になってもなおそうしたものに頼ろうとする心の弱さが自分のなかにあると気づいたから。

イ 認識票は戦友の死を思い出させ、生還した自分に後ろめたさを感じさせるものであり、それを小さなお守りと結びつけてしまったために、いっそう負い目を感じずにはいられないから。

ウ 妹のお守りが、死に直面していた兵隊たちの小さな認識票に重なって見え、お守り以外に頼むものがない状況に追い込まれている妹を前にして、何もしてやれない自分が悔しかったから。

エ 死を前提として兵隊たちが身につけていた小さな認識票をお守りから想起することで、生きようとしてお守りにすがっている妹のせつない姿にいつも死の影を重ねてしまうから。

オ お守りを見て認識票を思い浮かべたことで、戦場での体験で受けた心の傷が癒えていないことに思い至り、苦しむ母や妹を自分が支えていけるかどうか不安でならず、心細くなったから。

「 」

問三

線② 母は素朴に感動したが……自身もまた解きたい不安と祈りをもって考えざるを得なかった」とあるが、「妹」の「絵」に対する「ほく」の受け止め方を説明したものとして最も適当なものを次のア～オから一つ選び、記号で答えよ。

ア 妹の回復を喜ぶ母の気持ちに共感しながらも、妹の心の深いところにある生に対する不安と祈りをも感じ取ってしまい、絵が表すものが明るい希望なのか、不吉な予兆なのか、判断することができないでいる。

イ 母は妹の絵を回復のしるしとして喜んでいるが、心にひそむ複雑な思いを表現しきれない絵の稚拙さを見ると、

b 解答を本文にあてはめて文脈が正しく通るか確認することで、誤答を防ぐことができる。

c 傍線部にかかる漢字を用いた他の熟語を考えることも解答を導く手段のひとつ。「疾駆」など。

△理由説明を求める設問。妹のお守りと、死と隣り合わせにある兵隊たちの認識票とのつながりをふまえる。

△内容説明を求める設問。まず「一個のいのち」の指すものをきちんとおさえる。「自身」は「ほく」自身のこと。妹の絵に対する、母親と「ほく」の受け止め方の違いを、傍線部前後の文脈から把握する。

自分はどうしても母のように受け取れず、妹の回復を祈りながらもぬぐいがたい不安を抱いている。

ウ 母は観音様の絵に救いの予兆を見いだしているが、自分は妹の心のうちの切実な願いに気づきながらも、妹の将来が暗いのではないかと不安と救いが訪れてほしいという祈りと葛藤から逃れることができずにいる。

エ 母が親近感をもって絵を受け止めているのに対し、絵の向こうに何か不可解なものを感じ、妹がすでに手の届かないところに行ってしまったのではないかと不安を抱きつつ、なんとか妹と心を通じ合えたらと祈りつつもいる。

オ 絵を見て素直に喜んでいる母とは違って、妹の本能的な生への願いと死へのおびえを絵に感じ、そこに自分の心のうちにある家族の将来や妹の病氣に対する不安と祈りを重ねながら、絵の表すものに考えをめぐらせている。

問四

本文は空白行（30行目のあと）によって二つの部分に分かれている。「ぼく」の心情に即して前半と後半とを説明したものとして最も適当なものを次のア～オから一つ選び、記号で答えよ。

ア 妹の病氣にほんやりした不安を抱えつつも、家族の温もりを静かに受け止める前半から一転して、後半は、自身の不安の根源が戦争にあることがつきとめられ、それが鮎との出会いによって解消されるまでの過程が描かれている。

イ 妹の病氣をきっかけに変化した家族三人の関係を軸に、生の不安のなかにも安堵が見いだされていく前半を踏まえ、後半は、自身の内面の動きに焦点を移し、溯り鮎の描写へと展開することで生の喜びを浮かび上がらせている。

ウ 妹と心が通じ合わないことにいらだちを感じ、母と妹の純粋な結びつきをひそかに羨む前半とは対照的に、後半は、家族から離れた場所に自分の身を置くことでようやく得られた心の平安が、春の軽やかな風物を背景に語られている。

エ 病氣の妹にすべてをささげる母の姿に生命の純粋さを感じた前半に呼応して、後半は、川を溯る小さな鮎の姿に、懸命に生きようとする妹の姿を重ね合わせ、家族それぞれの未来に希望を感じはじめたことが述べられている。

オ 家族がそれぞれ異なった人生観をもつことが妹の病氣で浮き彫りになった前半を背景に、後半は、戦争の影をぬぐいきれない自身の死生観が示され、狭い水路を溯る鮎の姿に復員後苦労を重ねてきた自分の姿が描き込まれている。

◇葛藤Ⅱ①もめごと。いざこざ。争い。
②心の中に相反する思いが生じ、その選択に迷うこと。

△心情説明を求める設問。本文全体の内容をふまえて、主人公の心情をまとめる。妹・母親・「ぼく」という三者の交流を描いた前半と、「ぼく」の心理の推移に焦点を当てた後半について、それぞれ「ぼく」がどのような心境に落ち着いたのかを読み取る。